

ゴイサギ 英:Black-crowned Night Heron 学:*Nycticorax nycticorax*

1. 分類と形態

分類: コウノトリ目 サギ科

全長: 約575 mm

翼長: 259-310 mm

尾長: 94-116 mm

嘴峰長: 62-80 mm

ふ蹠長: 63.5-79.5 mm

体重: 485-683g (成鳥と亜成鳥15個体, 5月中旬~8月上旬)

※体重は、筆者他による測定。他は、高野(1981)による。

羽色: 雌雄同色。成鳥は、額から後頸にかけてと、背から腰にかけて灰青色。目の上から額までと、顔から腹面は白または薄い灰色。翼羽は灰色。後頭部からひも状の白い冠羽が数本生える。目の虹彩は赤。脚は黄。嘴は夏には黒だが、冬期は基部に黄色が入る。つがい形成期には、脚がサーモンピンクに、目先の裸出部が青色になる。幼鳥は、全体に褐色だが、白または淡黄色の斑が入る。目の虹彩は、巣立ち直後は黄色だが、1回目の換羽後赤く変わる。嘴および脚は成鳥の冬期と同じ。



写真1. ゴイサギの成鳥 冬羽。

鳴き声: 夜間に飛びながら「クワッ」、「コワッ」と短く鳴く。夕方にねぐらを飛び立つ際にもよく鳴く。ねぐらやコロニー内では、「コッワ、コッワ、コッワ…」という連続した鳴き声や、「ゴアー、ゴアー」といった声を聞く。静い時には、「キャッ」と甲高い声で鳴くこともある。ヒナは小さく、「カッカッカッ…」と鳴く。

2. 分布と生息環境

分布: ヨーロッパ、アジア、アフリカと南北アメリカに生息している。ヨーロッパと中東では、局所的。4亜種が知られている。日本に生息しているのは、基亜種 *N. n. nycticorax*。日本では、全国的に分布し、北海道と沖縄本島でも近年繁殖が確認されている。東北以北では基本的に夏鳥。それ以外では留鳥または漂鳥。青森県では9月になると夕方にねぐらから出発する渡りの群れを見ることができる(写真2)。



写真2. ねぐらから出発した渡りの群れ。

生息環境: 平地に多く生息する。主に水田地帯や河川などの水辺で採食する。市街地を流れる水路において、夜間に街灯の下で採食している姿を見かけることもある。繁殖は、河畔林や寺社林、公園・工場の緑地、高速道路の防風林など様々な環境で行なわれる。住宅地の緑地で繁殖を行なうこともしばしばあり、住民との軋轢が問題となる場合も多い。非繁殖期には、池沼や河川、公園や庭などの茂みでねぐらをとる。

3. 生活史

月 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

非繁殖期

繁殖期

非繁殖期

繁殖システム:

集団繁殖。他のサギ類やカワウ *Phalacrocorax carbo* などと混合コロニーを形成することも多い。一夫一妻制だが、つがい外交尾をしている可能性はある。

巣: 針葉樹や竹林など密な林の内部に営巣することを好みが、河畔林ではその限りではない。枯れ枝や折った生木の枝を用いて、荒い皿状の巣をつくる。

卵: 43.5~55 × 32.8~37 mm, 青緑色無斑の卵を3~6個産む(高野 1981)。

抱卵・育雛期間:

抱卵日数はおよそ24日で非同時孵化し、育雛期間は約28日(高野 1981)。雌雄とも抱卵・給餌を行なう。

婚姻ディスプレイ:

樹上で相手に接近したのち、頭を低くして冠羽と頭部の羽毛を逆立て、ゆっくりと足踏みをする。嘴に枝をくわえて、上下に首を動かすこともある。また、合間にしばしば羽繕いをする。つがい形成後に巣に並んで立ち、お互いの羽繕いをしている場面を見ることがある(写真3)。

5. 興味深い生態や行動、保護上の課題

●宵っ張りの朝寝坊

ゴイサギは基本的には夜行性である。日中は集団でねぐらをとり、日没になるとエサ場へと出かけていく。夜を通して採食し、日の出前にねぐらに戻ってくる。戻った直後は騒がしいが、しばらくすると静かになり、夕方まで気配を感じさせない程じっとしている。

しかし、繁殖期には昼間も採食をするようになる。著者の研究では、抱卵期には、1日交代で抱卵を行なっている可能性が示された。育雛期には、1日に3~5回、昼夜にわたって巣とエサ場とを往復する。ゆっくりと休息するのは、朝方と夕方との数時間のみであり、昼も夜も活動している。

繁殖期以外でも日中に採食している姿を見ることがある。例えば、上野動物園の屋外ペンギンプールでは、非繁殖期である冬期にもペンギンのエサを目当てにゴイサギが出現する(写真4)。彼らは大胆にも、ペンギンを脅してエサを横取りする。このことは、採食効率が特に良い場合には規定の行動様式を変えるという行動の柔軟性を示している。これらの鳥が、給餌の時間を予測して集まっているのかという問題は、興味深い研究材料である。



写真4. ペンギンに紛れてエサをもらうゴイサギ(→)。

●採食場所は慎重に選ぶ

青森県津軽平野では、繁殖地から10km以上離れた場所でも採食していることが観察された。個体追跡をした結果では、数日から数ヶ月にわたって同じエサ場を使い続けることがわかった。採食場所を替える際には、繁殖地からの飛去方向は概ね変わらず、それまでのエサ場と同方向で新たな採食場所を探す。この保守的な採食場所探索行動は、新しい採食場所で負うかもしれないリスクを減少させていると考えている。新しい場所でエサにありつけなかった場合に、“そこそこ”エサが採れることがわかっている場所が近くにあればそこに戻って採食できるからである。また、コロニーを飛び立った後、複数のエサ場で短時間(10~30分間)の採食を行い、最終的にその中の1箇所で夜を通して採食するという行動が観察されたこともあった(図1)。これは、より良いエサ場を選択するための、エサ場間の質の違いを比較するサンプリング行動であると考えている。

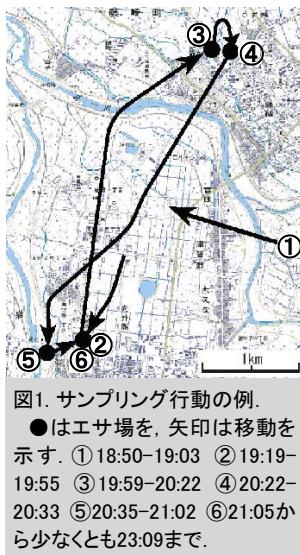


図1. サンプリング行動の例。
●はエサ場を、矢印は移動を示す。① 18:50-19:03 ② 19:19-19:55 ③ 19:59-20:22 ④ 20:22-20:33 ⑤ 20:35-21:02 ⑥ 21:05から少なくとも23:09まで。

●エサ内容は日和見主義

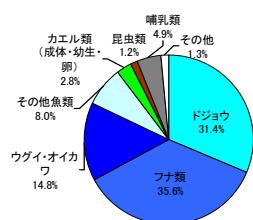
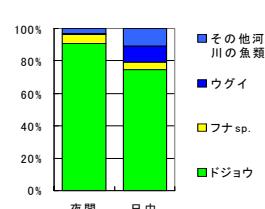


図2. 津軽平野南部におけるゴイサギのエサ内容内訳。1995~2000年の繁殖期前と繁殖期に採集した吐き戻しによる。エサ動物の重量よりパーセントを算出した。

魚類の他、カエル類、昆虫類、哺乳類や鳥類なども採食する(図2)。津軽平野では、春の水田灌漑前や直後は、コオイムシやハタネズミをよく食べる。灌漑後には、水田地帯に豊富なドジョウやカエル類を採食するようになるが、水田の中干し時期になると河川に生息する魚類の割合が多くなる。イネが生長し、水田から水が落とされる頃には、陸生であるコバネイナゴの採食も多くなるようである。

また、一日のうちでもエサ内容が変わる。夜間はドジョウやフナ類、カエル類といった水田地帯由来のエサ動物を多く採食しており、日中は河川由来のウグイやオイカワなどの魚類の採食が相対的に多くなる傾向が示された(図3)。水田地帯由来のエサ動物は、夜行性のものが多く、繁殖行動を行なっている夜間に目立つ。対して、河川に生息する魚類は、日中に遡上行動を行なう。ゴイサギは、魚道や堰堤で跳ね上がってくるエサを待ち伏せ採食するため、河

図3. 日中と夜間とのエサ内容の比較。日中は夜間に比べて河川由来の魚類が多い(Fisher's exact probability test: $P < 0.001$)。遠藤・佐原(2000)から作図した。エサ動物の個体数よりパーセントを算出した。



川では日中の方が採食しやすいと考えられる。つまり、エサ動物の活動性といった変動する環境に合わせて、採食場所を切り替えている可能性がある。

●保護上の問題点

サギ類を取り巻く問題のなかでも、繁殖地における人との軋轢は、近年最も大きな問題になっている。昨年に千葉県成東町で起きた事件は、その最も顕著な例だろう。私有地に形成されたサギ繁殖地の営巣木を土地所有者が繁殖中に伐採してしまい、鳥獣保護法違反で書類送検されることになったのだ。所有者は、周辺住民からの騒音や悪臭に対する苦情が多かったため伐採を決断したという。このような事件は珍しくなく、公にならなかっただけで、筆者も毎年のように同じ問題に直面している。

この事件の根本的な問題点は、私有地の林が人の出入りがなく、サギ達にとって安全な場所に見えたことだろう。この問題は、常から所有地の手入れをすることで回避できる。かつては、燃料や食材を調達するために屋敷林には人が頻繁に入り、手入れをしていた。しかし近年、その習慣が廃れてしまった。そこにサギたちが入ってきたのである。もちろん、住宅地の拡大も一つの要因であり、背景にはサギ類が繁殖できるまとまった林、人との軋轢が起きにくい河畔林などの減少も係わっている。

今年の5月に、NPO法人行徳野鳥観察舎友の会が企画した千葉県下全域サギ類コロニー調査に私も参加する機会をいただいた。繁殖場所の減少という根本的な問題を解決していくためには、このような基礎的な調査をもとにサギ類の繁殖場所選択に関する研究も必要だと考えている。このような活動がより広く行なわれ、サギのみならず人にとっても不幸な事件がなくなってくれることを期待している。

6. 引用・参考文献

- 遠藤菜緒子・佐原雄二. 2000. ゴイサギ(*Nycticorax nycticorax*)の繁殖期の日周活動と採餌場の利用. 日本鳥学会誌 48: 183-196.
高野伸二(監修). 1981. カラー写真による日本産鳥類図鑑. 東海大学出版会. 東京.
Voisin, C. 1991. The Herons of Europe. T & A D Poyser, London.

執筆者

遠藤菜緒子 立教大学大学院理学研究科
(生命理学専攻)動物生態学研究室

ゴイサギを研究し始めてから早10年。いつの間にか博士課程も5年目になりました。調査に行くのを我慢して、博士論文の準備をする毎日です。主にゴイサギの採食生態を研究していますが、コロニー動態にも興味を持っています。

